

Title	Salah PilihとSalah Asuhanのテーマの意義
Author(s)	森村, 蕃
Citation	大阪外国語大学学報. 27 p.41-p.56
Issue Date	1972-01-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80436
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Salah Pilih と Salah Asuhan のテーマの意義

森 村 蕃

Salah Pilih and Salah Asuhan

Shigeru Morimura

Salah Pilih and Salah Asuhan are social novels which were published by Balai Pustaka in 1928. The former was written by Nur Sutan Iskandar, and the latter was written by Abdul Muis. The two writers were from the same native place, —that is to say, Minangkabau in Sumatera. As is often the case with the social novels published in Balai Pustaka Period (1908—1933), the theme of these two novels is also ‘adat(traditional social custom) and kawin paksa (forced marriage)’. In the stories two generations are compared. One is the younger generation that longs for the improvement of the old traditional custom and the freedom from the bondage of the old custom. The other is the older generation that still tries to preserve the old traditional custom. The conflicts between these two generations are going on in them. In most of the social novels whose theme is ‘adat and kawin paksa’, the conclusion of the conflicts is the victory of the older generation. Namely, the younger generation (main characters in the novels) is destined to death. Hanafi’s fate in Salah Asuhan is just the same. But in Salah Pilih, Saniah and Rangkayo Saleah, the party that sticks to the old traditional custom are made to pass away. The way of giving the conclusion that the party that sticks to the old traditional custom is made to die is peculiar and alien to the other social novels whose theme is ‘adat and kawin paksa’. In this sense Salah Pilih is worth mentioning.

Besides the theme ‘adat and kawin paksa’, ‘the imitation of the western way of living and the western attitude toward life’ composes the motif of Salah Pilih and Salah Asuhan. This is also peculiar. By depicting that, these novels refer to the relation between the western customs and attitude toward life and the eastern customs and attitude toward life. This motif is more deeply treated of in Salah Asuhan than in Salah Pilih. In this sense Salah Asuhan is worth mentioning. In both novels the psychology of characters is carefully observed and depicted. Through the depiction of the imitation of the western way of life

and the western attitude toward life, 'ethics and morality in man's life' and 'man's reason' are pursued and suggested. Salah Pilih and Salah Asuhan are psychological and ethical social novels.

は　じ　め　に

Salah Pilih と Salah Asuhan は、1928年バライ・プスタカ（国民文化局）から発刊された社会小説であり、前者は Nur Sutan Iskandar によって、後者は Abdul Muis によって著わされた。この二つの文学作品は、その発刊の年が同じであるのみならず、その作者も同じメナンカバウの地出身である。

一般に文学史上バライ・プスタカ時代といわれる近代文学の初期の時代（1908年—1933年）に発表された大部分の小説は、伝統的慣習であるアダット (adat) と強制結婚 (kawin paksa) を主題とする。Azab dan Sengsara (M. Siregar 1921年), Siti Nurbaja (Marah Rusli 1922年), Tjinta jang memaawa Maut (N. St. Iskandar; Abd. Ager 1926年), Darah Muda (Adinegoro 1927年), Pertemuan (A. St. Pamoentjak n. S. 1927年), Asmara Djaja (Adinegoro 1928年), Djeumpa Atjeh (Zainuddin 1928年), Dian jang tak kundjung padam (St. Takdir Alisjahbana 1932年), Karena Mertua (N. St. Iskandar 1932年), Pertemuan Djodoh (Abdul Muis 1933年) といった作品と同様に、Salah Pilih と Salah Asuhan もこの時代の代表作品である。作品の中では古い世代の階層と新しい世代の階層の二つの側が対比される。そして世襲的慣習を維持していこうとする古い世代の階層と、新しい時代の要請に合わなくなったところの古い慣習の改善とその束縛からの解放を希求する新しい世代階層との間に、対立抗争が展開される。

Salah Pilih と Salah Asuhan の中では、ただ慣習と強制結婚を主題としてこれをめぐって古い世代階層と新しい世代階層の間の対立抗争のみが展開しているだけではない。この二つの作品の中では、更に「西洋の生活様式・生活態度に対する追従とその模倣」の問題が motif とされる。この「西洋の生活様式・生活態度に対する模倣」の問題が両作品で描写されているという事実は既に明らかにされていることであるが、これら両作品が著わされた当時、オランダ政庁の倫理政策が実施される中で、当時の西洋近代教育を受ける青年の一部が盲目的に西洋狂の態度をとる、いわゆる社会病の青年の姿が両作品の主人公 Asri や Hanafi 自身に描写されるということだけにとどまっているのであろうか。私は、「西洋の生活様式、生活態度の模倣」の問題が描写されることによって「慣習」と「生活」に対する姿勢の根本問題にまで深く掘り下げられているものと思う。この点が慣習と強制結婚のみをテーマとする他の作品と異なったユニークなところであり、本稿では、上述の両世代階層の抗争の展開の位置づけはさることながら、併せ「西洋の生活様式・生活態度の模倣」の問題が如何に描写され展開されているかを分析しながら、追究さ

れんとしているものを考察してみたい。

I

いわゆる古い世代階層と新しい世代階層との間の対立抗争は、伝統的慣習 (adat) について、特に結婚に関する慣習について展開される。Salah Pilih では5組の、Sahah Asuhan では2組の新しい世代階層の結婚をめぐる、両世代階層の間に対立相剋が展開されている。Salah Pilih に於ける方が Salah Asuhan に於けるよりは入り込んでいる。古い世代の階層は、代々の慣習を永久不変のものと看做し、代々から継承された財宝と考えるものであって、あくまでこれに固執し維持していこうとする。一方、新しい世代の階層は、慣習の中にはもはや新しい時代の要請に合わなくなって、その存続が却って民族社会の発展を阻害するものがあることを認める。彼等は特に結婚に関する慣習がそうであることを認め、この束縛からの解放とその改善を希求する。Salah Pilih に於ける新しい世代階層の結婚とは Asri と Saniah, Asri と Asnah, Sutan Penghulu と Sabariah, Kaharuddin と Asnawiah, Rusiah と Sutan Sinaro のそれぞれの場合である。一方 Salah Asuhan のそれは、Handfi と Rapih, Hanafi と Corrie du Bussée のそれぞれの場合である。Salah Pilih では、前述の他の作品に於けるのと同様、東洋社会内の結婚とその慣習の問題をめぐる描写されるのであるが、Salah Asuhan ではただそれだけにとどまることなく、更には Hanafi と Corrie との間に見られるように、東洋人と西洋人との間の結婚という国際結婚にまで発展する。

Salah Pilih という作品は、作者 Nur Sutan Iskandar の故郷 Sungai Batang (ミナンカバウ) を舞台にストーリーが展開し、三人のミナンカバウ青年 Asri, Asnah, Saniah が主人公である。Asri は「親が子供の意志・希望を無視して身分・地位・財産に基づき子供の結婚相手を決める」という従来の慣習に反対する。彼は次のように言って、これを非難する。„……Pekerjaan itu dilakukan oleh orang tua kedua belah pihak saja, dengan tidak mengindahkan perasaan kedua makhluk yang akan diperhubungkan itu. Perbuatan semacam itu tidak baik, terlalu keras……dan berbahaya!……”〔そのこと(結婚の決定)は結ばれる二人(子供達)の気持を無視して両側の親だけによって行われている。そのような仕打は良いものではなく、余りにも厳しいことだ……そして危険だノ……〕⁽¹⁾。彼は Negeri の地に住む彼の友人 Kaharuddin の妹である Saniah を自ら結婚相手として選ぶ。Asri の母親である Ibu Mariati は、従来の結婚の慣習である強制結婚を Asri に通用させない。彼女はその慣習をもはや新しい時代の要請に合わなくなったものと悟っている女性で、新しい時代潮流に目覚めた思慮ある女性として描かれているが、一方 Saniah の母親である Rangkayo Saleah は、家柄・財産・身分地位を重んじ、従来の慣習に固執する。Saniah は Asri に対し愛情がないが、母親 R. Saleah によって従来の慣習に従い Asri と強制結婚させられる。結婚後 Asri と Saniah の間には諍いが絶えず、二人は不幸

な生活を送る。Saniah は H. I. S. 卒業生であるが、母親の性格を受け継ぎ横柄・傲慢である上、夫の Asri に対しては勿論、他の家族の者にも尊敬を払わない。Asri は近代精神・ヒューマニズムを尊重するが、Saniah は母親 R. Saleah と同じ主義・主張であり、従って二人は根本的に見解が異なる。Asri は誤って Saniah を選んでしまうことになる (Salah Pilih)。

一方 Saniah の兄弟である Rusiah と Kaharuddin は Saniah と全く対照的であって、従来の結婚の慣習に反対する。二人は、この慣習はもはや時代の要請に合わなくなった空虚なものであると考える進歩的青年である。二人は、特に母親 R. Saleah と妹 Saniah が固執する「貴族という家柄を自負する風習」のもとではヒューマニズムが生まれてこないか、或るいは生まれてきても枯れてしまうと考えたものであって、⁽⁹⁾母親、妹と対立する。Saniah の姉 Rusiah は Asri との結婚を考えるのであるが、Asri が Bukittinggi で勉学を続ける間に、母親 R. Saleah によって教師の Sutan Sinaro と強制結婚させられる。二人の場合は強制結婚であるが、悲運に終わらない。というのは二人は理性をもって新しい時代の潮流に目覚めているからである。結婚後二人は R. Saleah の強要する慣習に従わず、これを打破する。Saniah の兄 Kaharuddin も母親 R. Saleah によって強制結婚を強いられるが、彼はこれを排斥する。彼は Asri と同様、従来の結婚の慣習を斥けて自ら結婚相手を選ぶ。彼は H. I. S. 卒業生 Asnawiah とパダンで結婚する。Kaharuddin の父 Datuk Indomo は、Asri の母親 Ibu Mariati と同様に、新しい時代潮流に目覚めた進歩的見解を持つ理性ある親であるが、妻 R. Saleah の前では全く無力な夫である。R. Saleah は夫の意見も聞き入れず、Kaharuddin の結婚には絶対反対で、従来の慣習に固執し、これを強要する。

R. Saleah は、Saniah が気に入らないところの Asri の態度を Saniah 自身から聞いて激怒する先々に、Kaharuddin がパダンで結婚したという知らせを聞くや、結婚を破棄させる為に Saniah と使用人 Sidi Sutan を無理に連れてパダンへ自動車で出発する。途中 Ganting 村附近に急カーブの険しい道があって、ここで自動車は事故を起こし、水の枯れた川の中へ落ち込む。この事故で R. Saleah と Saniah は自動車の下敷きになり、R. Saleah は即死するが、Saniah は重傷を負う。運転手と Sidi Sutan は田の中へ落ち、運転手は重傷を負うのに対し、Sidi Sutan は全く無事である。Saniah は Bukittinggi の軍事病院に運ばれるが、まもなく死亡する。Asri は慣習の束縛から解放され、また Kaharuddin と Asnawiah との結婚生活は安泰を得る。ここで注目すべきことは慣習をめぐる対立抗争の帰結のなされ方であって、慣習を象徴する R. Saleah と Saniah を自動車事故死させることによる方法である。慣習と強制結婚をテーマとする大部分の作品に於ける両世代階層の対立抗争の結末は、慣習に固執する古い世代階層の勝利であって、新しい世代階層である青年階層は「死」という悲劇的な命運をたどる。換言すれば、これらの作品の作者は慣習の束縛からの解放とその改善を希求する青年階層を「死」という永劫の世界に追いやる。Azab dan Sengsara では Mariamin, Siti Nurbaja では Siti Nurbaja, Djeumpa Atjeh では Siti Saniah, Salah Asuhan では Hanafi, Dian jang tak kundjung padam では

Molek といったそれぞれの青年主人公が、強制結婚の結果「死」という悲運をたどる。しかし Salah Pilih に於いては上述のように慣習に固執する側が「死」を経験する。この慣習に固執する側を「死なせる」という結末を与える方法は、慣習と強制結婚をテーマとする他の作品には見られず、この意味に於いて Salah Pilih は特筆すべきである。

Salah Pilih に於けるもう一人の青年主人公は、ミナンカバウ女性 Asnah である。彼女の父 Sutan Penghulu は、青年時に従来慣習に反対し、自ら Sabariah と結婚するが、彼の母親と叔父 engku Datuk Raja Penghulu とによって従来慣習を強要される。Sutan Penghulu はあくまでこれに屈せず対立する。彼は Panian で商業を営んでいるが、その資本は上述の叔父のものである。遂に、慣習を受け入れないという理由で、彼は叔父に商業資本を奪われ生計の道を失う。しかし彼は Gajo の地へ行って再び商業を始める。ここでも作者によって指向されているところは従来慣習に対する抗議とその打破である。Sutan Penghulu がアチエへ行商に出かけた或る時に、アチエの武装した徒党の一味に襲撃され、彼は不慮の死を遂げる。それ以後、妻の Sabariah と子供 Asnah は Asri の母親 Ibu Mariati の家に住む。やがて家の手伝いをする Sabariah が亡くなり、Asnah は Ibu Mariati の養女になる。Ibu Mariati は Asnah を Asri 同様、実子のように可愛がり養育する。Asri も Asnah を彼の実の妹のように看做し、二人は共に成長する。Asnah は Asri が Saniah と結婚した時は心が痛む。というのは彼女が物心のついた小学校卒業の頃から Asri に対し兄弟愛以上に「恋」を抱いてきたからである。更に彼女は Asri をいくら思っても無駄であると心で悶える理由は、自己を孤児であると卑下したことと、ミナンカバウ社会では同じ suku の者は結婚できないという従来からの慣習が厳然として立塞がっていたからである。この彼女の煩悶の心理描写は生き生きとしていて鮮明である。Asri が Saniah と結婚した後も、Asri に対する Asnah の愛は清純なるもので変わることがない。Asnah も Asri, Kaharuddin, Rusiah と同じように、結婚の慣習の束縛からの解放とその慣習の改善を希求する進歩的青年階層に属する。彼女が Saniah と対立するのは、次の彼女と Saniah との対話に明瞭である。

(Asnah): „Aku tidak mengharap harta orang, kak Saniah. Dan aku tidak hendak kawin dengan harta……” (Saniah 姉さん、私は人の財産を望んでいません。また私は財産によって結婚しようと思いません……)⁽³⁾

(Saniah): „Ya, Allah. Semacam engkau ini pula yang hendak kawin dengan cinta. Hm—tak sadar akan asal diri.……” (まあ、あなたも愛情によって結婚しようと思っているようだ。フー—自分の由緒に気づかなくて、……)⁽⁴⁾

一方 Asri も Saniah と結婚する以前、Mulo を卒業して帰郷してから Asnah の心身に魅惑されるのであるが、Saniah と結婚する結果になってしまう。Saniah の死後、Asri は慣習に固執する側によって再婚を求められるが、あくまで慣習に反対し、これと対立する。彼は「結婚する当人双方の愛情に基づく結婚」を求め⁽⁵⁾、遂に suku 同志の結婚を禁じる慣習を打破して Asnah

との結婚を決意する。或る夜、Asri の叔母 Ibu Mariah の家で Ibu Mariah の世話により orang alim である engku Kadhi が呼ばれて二人の結婚が行われる。こうして Asri と Asnah の愛はかなえられる。2, 3 日後に二人はジャワへ向い、そこで新生活を始めることになる。物質的には恵まれた生活ではなかったけれども、二人は愛情で結ばれた幸福な生活を送ることができる。最初は、彼等は慣習を犯したとということから故郷の人々に冷笑され、非難されるのみならず、ジャカルタ在住の同郷の人々にも相手にされない。しかし、これらの人々も次第に新しい時代の潮流に目覚めてくる。一年程してから Asri は故郷 Sungai Batang の慣習長 engku Datuk Bendahara から手紙を受ける。それは Asri を村長にすることにすべての村人は意見が一致し、直ぐに帰郷することを求めるものである。村人は新しい時代の要請に、近代社会の新しい潮流に目覚めたというものであって、そこで Asri と Asnah は帰郷し、村人は二人を歓迎するといふところでストーリーは終わっている。従来の慣習に固執する側が敗北を喫し、青年階層の側が勝利をおさめるという帰結に終わっている。

一方 Salah Asuhan という作品では、青年主人公は Hanafi, Rapih, Corrie du Bussée である。ミナンカバウ青年 Hanafi も村の慣習による結婚に反対する。彼はこれを次のように厳しく非難する。„……Perkahwinan di-negeri kita ia-lah ‘handelstransacties’ belaka, dan akan mengganggu moral segala orang yang sudah mempelajari ‘Westerche beschaving’.” (……我々の地の結婚は全くの売買であり、西洋の慣習を学んだすべての者のモラルを妨害するものだ。／)⁽⁶⁾。彼は Asri と違って土着人女性との結婚を望まない。土着の慣習や生活様式は彼を嫌悪させ、彼をして西洋の慣習や生活様式に、また西洋人女性との国際結婚に駆立てる。彼は Corrie du Bussée との結婚を望む。彼女はフランス人父親 Tuan du Bussée と Solok のミナンカバウ人女性との間に生まれた混血娘であるが、西洋人社会に属する。Hanafi と Corrie との関係は Salah Pilih に於ける Asri と Asnah との間に於ける関係と同じで、二人は幼少の頃から兄弟のよに交際し、二人の関係は兄弟愛の絆で結ばれたものである。だが、Corrie が H. B. S. の休暇にバタビアから Solok に帰省した時、彼女に対する Hanafi のそれまでの兄弟愛は恋と変わる。彼女は最初、彼との結婚を思案し、彼から遠ざかってパダンに行く。一方 Hanafi の母親は彼の国際結婚には反対で、彼女はあくまで代々の慣習に固執する。Hanafi がバタビアで在学中、彼女は彼女の兄 engku Sutan Batuah と、彼の娘 Rapih と Hanafi との婚約を慣習に従ってとりかわす。つまり Hanafi は慣習に従っていつこの Rapih との強制結婚を強いられる。彼は慣習に固執する側（彼の母親や mamak）に「sa-butir intan yang belum di-gosok（未だ磨かれざる一個のダイヤモンド）—Rapih」⁽⁷⁾を与えられるのである。彼の母親によると、彼がバタビアで在学中の学費は彼の mamak、とりわけ engku Sutan Batuah の援助と厚意によることで、budi には budi を以って返さなければならないと諭される。彼は自己の運命を悔むがどうにもならない。彼は Rapih と結婚せざるをえないが、彼女をただ「母から与えられた妻」と看做す。Rapih は自己の夫に対して忠実な、いわゆる模範的な回教女性であるが、夫

Hanafi からは愛情と憐憫の情は期待できない。二人の間に子供 Shafei が生まれる。Hanafi はこの子供にも少しも構わない。Hanafi の母親は Hanafi に彼の態度について注意をしても、彼はそれを改めるどころか、妻 Rapiah に対して彼の苛酷さが一層厳しくなる。或る日、副理事官の夫人がテニスコートの大衆の前で Hanafi が妻に対する義務を忘れていることを非難するに及び、これ以後、彼は人々から敬遠される。遂には、彼の友人に残るのは郵便局員 Suze 嬢と或る西洋人教師夫妻だけになる。このように Hanafi が人々から敬遠されるようになったことは、彼と彼の妻との間を一層離反させる結果になる。彼は妻が中傷したものと邪推し、遂には、妻 Rapiah をもはや妻としてではなく、強制して彼に与えられた女中 (babu) と看做す。Salah Pilih に於ける Asri と Saniah の場合と同様、Hanafi と Rapiah は強制結婚の結果不幸に終る。或る土曜日、Hanafi の家に狂犬が入ってきて、彼の左手はこの犬に噛まれる。彼はバタビアの Instituut Pasteur へ治療に出かけることになる。

一方 Corrie はバタビアの H. B. S. で勉学を続けているが、或る夜、彼女がピアノのレッスンを終えて Gambir Selatan へ通じる支道を自転車に乗って彼女の寮 Salemba へ帰る途中、偶然 Hanafi に出くわす。これ以後、二人は再びもとのように交際する。自己の運命に対する彼の悔恨の念と慣習に対する彼の嫌悪感は深まって、遂に、彼は理性と妻子・母親に対する義務感を失う。彼は Solok の副理事官事務所の官吏の職を自ら辞職し、バタビアの Department B. B. に転勤を希望する。母親宛に彼は手紙を送って「西洋人になることを求める願書を入れ、土着人たる身分を自ら捨てたこと」を宣言し、妻 Rapiah との離婚状を同封する。母親は当惑するが、彼が神霊を受け、自ら自己の過ちを悟って帰省するのを待つ。母親と Rapiah と Shafei は村 Kota Anau に帰る。やがて Hanafi は、転勤と西洋人たる権利が認められたところで Corrie に求婚する。彼女は暫時、思案する機会を求めるが、遂には同情の気持で半ばやむをえず彼の求婚を受け入れるのである。二人はバタビアで密やかに結婚し、そして Gang Ketapang で借家住まいを始める。これで Hanafi の愛はかなえられるが、二人は国際結婚を行った為に、次第に土着人、西洋人の双方から敬遠され、社会から孤立する。結婚して2年後、二人の生活は破綻をきたす。Hanafi と Corrie との間に些細な事で諍いが生じ、このことが二人を離婚に導く。やがて Hanafi は自己の性急さを悟って、Corrie に会いにスマラングへ行く。しかし彼女はコレラに罹っていて、rumah sakit Paderi で彼は彼女の臨終にあう。Hanafi は慣習の束縛からの解放を願って、このように Corrie との国際結婚を求めたが、自らの失敗に終る。彼は帰郷し、パダンの夜市で彼の家族と出くわすが、Rapiah の親は Rapiah と Shafei を Bonjol の家に連れて帰ってしまう。これは、Rapiah の親が「Rapiah に対して Hanafi が態度を改めること」を、また「慣習に対して姿勢を改めること」を Hanafi に対し求めるものであった。Hanafi は母親と共に Kota Anau の母屋に帰る。彼は Rapiah を再び妻に迎える気はなく、亡くなった Corrie をただ恋い慕って暮しているにすぎない。彼にはこの世の生活はもはや価値があるものではなく、夢も希望もなくす。彼の母親は Rapiah と Shafei が Bonjol から帰ってきて共に暮らす

ことを依然望む。つまり、彼女は Hanafi に慣習に従うことを求める。それ以来、彼はノイローゼになり、死の世界での Corrie との再会を求めて昇華物を飲んで自殺を図る。強制結婚の結果、彼のとらざるをえない最後の道は「死」である。

Salah Asuhan に見られる結婚の慣習をめぐる対立抗争の結末は、「慣習に固執する側の勝利」である。Hanafi は慣習の束縛からの解放を願って、自ら愛する Corrie との国際結婚を求めたが、これに失敗し、Rapih との強制結婚の結果、最後にとらざるをえない道は「死」という慣習からの逃避の道である。Hanafi の「死」という命運は、慣習と強制結婚をテーマとする前述した作品の中、Azab dan Sengsara では Mariamin, Siti Nurbaja では Siti Nurbaja, Djeumpa Atjeh では Siti Saniah, Dian jang tak kundjung padam では Molek といったそれぞれの主人公のたどる運命と同じである。上述の作品に見られるように、結婚の慣習をめぐる抗争に於いて、強制結婚の結果、青年階層は「死」という永劫の世界に移されるという結末の方法は、慣習と強制結婚をテーマとする大部分の作品に見られるものである。「強制結婚は後日、好ましからぬ不幸と悲惨をもたらすものだ」ということが、作者によって示唆されようとしているのであって、作者が古めかしいと考える当時の結婚の慣習に対して抗議する方法である。ただ Salah Asuhan に於いて異なるところは、国際結婚の問題が取扱われている点である。これは次のⅡの中で述べるように、「東洋人は東洋人の生活観を尊重しなければならぬ」とする古い世代階層の忠言が生かされている。

一方 Salah Pilih に於ける結婚の慣習をめぐる対立抗争の結末は、Salah Asuhan 及び前述した他の作品に於ける場合とは全く対照的に、「慣習に固執する側の敗北」であり、「進歩的青年階層の勝利」である。これは Pertemuan, Darah Muda, Asmara Djaja, Pertemuan Djodoh といった慣習と強制結婚をテーマとする作品の中に於ける結末と同様である。Pertemuan の中では Masri, Darah Muda では Nurdin, Asmara Djaja では Rustam, Pertemuan Djodoh では Raden Suparta がそれぞれ Salah Pilih に於ける Asri 同様、青年主人公であって、彼等はもはや作者によって死を経験させられない。Salah Pilih では、慣習に固執する側は近代社会の新しい潮流・新しい時代の要請に従うべきことが示唆され、近代精神の確立を指向する方向が一層顕著に表出されている。Salah Pilih の中ではもはや慣習からの青年階層の逃避は見られない。この意味に於いて、Salah Pilih では慣習に対する強い姿勢が窺うことができる。

結婚の慣習についての両世代階層の対立抗争をめぐる共通して追究されんとしているものは、両作品に於いても、若い世代階層の希求する「結婚の慣習の束縛からの解放とその慣習の改善」である。

Ⅱ

Salah Pilih と Salah Asuhan の中では、慣習をめぐる古い世代階層と新しい世代階層との間の対立抗争のみが展開しているだけではない。慣習と強制結婚をテーマとする他の作品と違っ

て、この二つの作品の中では、更に「西洋の生活様式・生活態度に対する模倣」の問題を描く。これらの中では前述の他の作品と異なり、新しく東洋と西洋の慣習と生活哲理に対する根本的な姿勢が言及され、「倫理・道徳」と「理性」の問題が深く追究されているのである。Salah Pilih では青年主人公 Asri をめぐって、Salah Asuhan ではやはり青年主人公 Hanafi をめぐって西洋の生活様式・生活態度模倣の問題が描かれる。Asri と Hanafi はそれぞれ西洋の生活様式・生活態度を求め、これを模倣する。Hanafi の方がずっとこれに盲目的であって、西欧主義の行動をとる。従って、Salah Pilih より Salah Asuhan に於ける方が、この問題はより深く描写される。Asri と Hanafi はそれぞれ一人っ子である。彼等の父親は、彼等がそれぞれ幼少の頃に他界し、従って母親の手によって育てられる。彼等はまたバタビア（ジャカルタ）で西洋の近代教育を受ける。Asri の母親は結婚の慣習の改善を自覚するのに対し、Hanafi の母親は従来の結婚の慣習に固執するが、彼等の母親は二人共、共通して東洋の生活哲理に詳しい思慮深い女性として描かれる。前述したとおり、Asri の Asnah に対する関係は、Hanafi の Corrie に対する関係と類似している。このように、主要登場人物の構成が両作品に於いて全く類似する。では、この西洋の生活様式・生活態度模倣の問題が Asri と Hanafi をめぐって如何に描写されているのであろうか。

Asri は医者になる目的をもって、ジャカルタで西洋教育を受けるが、この間、多数の西洋人と交際する。彼は彼のミナンカバウ村落社会の代々から継承された礼節の慣習をほとんど忘れ、西洋社会の社交の慣習に慣れ、これに倣う。例えば、彼が Mulo を卒業して帰郷した際、Asnah と再会した時の Asnah に対する彼の態度や、彼と Saniah との婚約の儀式が催された際、彼の婚約の印である sirih を身内の女性達が Saniah の家に送り届けて帰ってきた時の Asnah に対する彼の態度がそうである。つまり、彼の内心から出た嬉しさ・喜びの表現は、抱擁・接吻という西洋方式で表わされようとする。彼の行動は、こういう喜びの表現はただ言葉や眼差、微笑のみで表わされるという東洋社会固来の礼節を忘れた結果であるが、彼の行動は東洋社会に受け入れられない。次の Asri と Asnah との対話に見られるように、Asri は東洋社会の慣習を古風なもの考える。

(Asnah): „……Semasa kita masih kecil, memang boleh kita ber-main², berjalan², tertawa² dan ber-peluk²an. Akan tetapi sekarang ini kita sudah muda remaja. Hingga ini keatas kelakuan sanak laki² harus berhingga-berbatas kepada saudaranya yang perempuan. Kalau tidak kita pakai adat itu, nischaya kita hina dimata orang.” (……我々は幼少の頃、実際、遊んだり、散歩したり、笑ったり、抱擁しあったり出来ました。しかし現在は、我々は成人したのです。これからは、親族男性の行為は女兄弟に対して限度がなければなりません。もし我々がこの慣習を用いなければ、きっと我々は人の目には卑しむべきものなのです。)

„Ah,” kata Asri dengan merah warna muka-nya, „adat kuno! Masa orang yang bersaudara, seperti kamu dan aku ini, akan berlaku sebagai orang lain!……” (「あっ!」と Asri

は顔を赤くして言う。「古風な慣習だ、君と僕のような兄弟が他人のように振舞うことができようか、……」⁽⁸⁾

(Asnah): „……Yang janggal pada adat kita harus dielakkan. Sebab adat kita itu bukanlah di-buat² saja. Jika tak ada paedah dan manfaatnya, nischaya takkan dipakai orang selama ini. Ingatlah, kanda, sedangkan jika seorang laki² hendak naik kerumah saudaranya atau kemanakannya yang perempuan, sebelum naik tangga ia harus batuk² dahulu. Atau ia berdiri dihalaman sebentar sambil berkata kuat², sekadar terdengar keatas rumah.” (……我々の慣習に不都合なことは避けねばなりません。我々の慣習はわざとされたものではないからです。もし慣習が役に立つものでなければ、きっとこれまで人に用いられなかったでしょう。或る男性が自己の女兄弟の、或るいは姪の家に上ろうとする場合ですら、階段を登る前に、この男性は先ず咳きこまねばならないか、或るいは家に聞えるように大きな声で話しながら、しばらく庭で立たねばならないことを思いおこさない。)

(Asri): „, Apa pula sebabnya maka kita harus ber-susah² sedemikian?” (我々がわざわざこうしなければならないのはどうしてなのか。)⁽⁹⁾

Asnah は Asri に対し礼節を喚起する役割を演じる。東洋社会に生きている礼節は、長い伝統のもとに培われ、はぐくまれてきたもので、東洋社会の環境にマッチした尊いものであるから、人々が平和に生活する為にはこれを正しく理解し守ることが生活のあり方であり、生活哲理というわけである。大切なのは礼節に対する尊重の精神であって、生活上の倫理・道徳と東洋社会の生活哲理を正しく理解する理性が追究されている。Salah Asuhan に於いても、例えば次の Hanafi と Corrie との対話に明らかなように、Corrie が Hanafi に対し礼節を喚起する役割を演じている。これは、Asnah が Asri に対して同じ役割を演じる構成と類似するものであり、Salah Pilih に於ける前述の同様のことが Salah Asuhan に於いても追究されている。

(Hanafi): „Kesopanan? Apa-kah perbuatan kita, dudok berhadapan antara satu meter jarak-nya, di-batasi oleh meja teh, di-tempat terang dan pada waktu yang lazim di-pergunakan orang buat berkunjong-kunjongan boleh di-katakan melanggar peri kesopanan?” (礼節だって？人が通常、訪問しあう時刻に、明るい場所で茶机をはさんで1メートルの間隔を開けて向い合い坐りながら、我々がしていることは礼節というものを犯すことと言い得るのか。)

(Corrie): „Tidak, hanya……engkau bujang, aku gadis, sesama manusia kita telah menetapkan pelbagai undang² yang tidak tersurat, tetapi yang harus di-turut oleh sakalian manusia dengan tertib, kalau ia hendak hidup aman di-dalam pergaulan orang, yang memakai undang² itu.” (そうではないのです。ただ……あなたは独身男性で、私は娘です。我々人間同胞は、成文化されていないものであるが、使用する人間の交際に於いて平和に生活しようと思うなら、すべての人間によってきちんと従われねばならないところのいろいろな不文法を決めています。)⁽¹⁰⁾

Asri 同様、Hanafi も幼少の頃、父親を亡くし、母親に「まるで掌に一杯の油を運ぶかのよう」に^[41]大事に育てられる。その後、彼は母の養育から離れ、バタビアのオランダ人学校に行く為に、オランダ人の家で寄宿してすべての東洋人の社交から離れた生活を送る。彼は H.B.S. 卒業後、Solok の副理事官事務所の属官になり、母親と一緒に Solok で住むことになる。彼は東洋社会の慣習、生活様式・生活態度に順応しない。彼は、これらの中にはよい面もあることを認識せずに、ただ土着的なものはすべて排斥する。「東洋社会の慣習や制度を „kuno” (古風) と、また、回教を „tahjul” (迷信) と批評し、冷笑する。」^[42] 村人を水牛同然の賤しいものとか、古風と看做し、母親以外は村人と交際しない。彼が交際するのは西洋人だけである。母親を保守的な考えを持つ愚者と決めつけるものの、ただ彼の母親だけが彼とミナンカバウ世界、イスラム世界との関係を結ぶものにすぎない。彼は東洋の生活哲理を正しく理解する理性を失い、ただ西洋の生活様式・生活態度に盲目的に倣うものである。前述したように、彼は村の慣習による結婚や土着人女性との結婚を好まない。彼は西洋教育を受けた結果、理想が高く、土着人女性は彼の感情や理想を満たすものではない。彼は、前述のように、西洋人女性 Corrie との国際結婚を望む。ストーリーの中では、国際結婚は次のように一般化され、普遍化されている。つまり、国際結婚というものは東洋人、西洋人共、大多数が感情的に反対するもので、東洋人社会及び西洋人社会に受け入れられないものなのである。というのは、イギリスの文学者 Kipling が言っているように、「西洋は西洋であり、東洋はあくまで東洋であって、両者は合することはない」というのである。東洋には東洋の、西洋には西洋の慣習と生活哲理が支配していて、この相異によって、また東洋人と西洋人との間の感情の相異によって、この国際結婚は後日好ましからぬ結果をもたらすもので、従って時期的に未だ行われるのには好ましくないとみるのが健全な考え方なのである。Hanafi は慣習の束縛からの解放を希求し、自ら愛する西洋人女性 Corrie との結婚を望み、追い求めるが、彼女との結婚は国際結婚である。国際結婚を行なう結果どうなるのか。彼は生活哲理を理解する理性を失い、ひたすら Corrie との国際結婚を望み、追い求めることになる。Corrie は Hanafi の近くにいることは自己の心の弱さを知るのみと判断して、彼から遠ざかることを決心する。

Corrie が Solok を離れて後、前述のように Hanafi は慣習によって、いとこの Rapih と強制結婚させられるが、妻に対する義務を忘れる。彼の母親によって「未だ磨かれざる一個のダイヤモンド」を与えられたが、それを磨くという義務を忘れるのである。彼は Rapih のように自己の夫に対して尽す回教女性のすべての義務を冷笑する。更に彼は子供の Shafei にも少しも構うことがない。このように Hanafi は妻子に対する義務を忘れ、少しも自己に目覚めない為に、人々は近ずかない。これは妻 Rapih の中傷によるものと邪推し、妻に対して益々苛酷に振舞う。或る土曜日の夕方、彼は突然、家の中に入ってきた狂犬に左手を噛まれ、バタビアへ治療に行かざるをえない。バタビアで Corrie に再会することになり、彼女は彼に妻子と母親に対する彼の義務を説くが、彼は一向に自覚しない。彼は Solok を離れてバタビアで治療中、妻や母

親に便りを全くせず、また彼が親友と呼んでいる者達へ彼の母親、妻子宛に託す報道は一言もない。更に彼はバタビアの Kantor B. B. に転勤を求め、また西洋人と同等の権利を求める請願書を出す。彼は Rapijah との離婚状を家に送り、彼の称号である Sutan Pameman を捨て、土着の社会からすべて身をひいて西洋人になろうとする。やがて政令により彼は西洋人たる権利を認められ、Christian Han という名前の使用が許可されるが、ここで Corrie に求婚する。このように Hanafi は母親・妻子に対する義務を忘れるほか、教養があって礼節を知る者がなすべきでない離婚を行ない、東洋の生活哲理を捨てて、ただ西洋人たることを求めることになる。まさしく西洋狂である。Corrie は、前述のように暫時、思案する余裕を求めるが、彼に対する同情によって中ばやむをえず彼との結婚を決意する。彼女は東部ジャワにある彼女の学校時代の友人宅で婚約祝いのパーティを開く為の計画を立てるが、この友人の父親（西洋人）は、Corrie がオランダ人になったマレー人と婚約したことを知るや、彼女に対し冷やかな態度を示す。彼女は国際結婚の難しさを身をもって知るが、二人はバタビアで密やかに結婚することになる。しかし二人は東洋人社会、西洋人社会の両方から敬遠されるのは、東洋人も西洋人も大多数が感情的に反対する国際結婚を行ったからだ。結婚後、二人の間に見解の相異によって諍いがまたよく生じる。或る日、些細なことで Hanafi が Corrie を不貞の妻と邪推したことによって、二人は離婚する。Hanafi は政令によって西洋人として認められたが、西洋人社会から敬遠されるのは、西洋人社会は彼をまだ土着人と看做しており、彼を西洋人として受け入れるのを嫌悪するからである。西洋人は、彼が東洋人としてとどまって東洋性を失うことがなければ、彼に礼節と教養のある東洋人として尊敬を払うのであるが、彼は西部スマトラに妻子がいるにもかかわらず、西洋人女性 Corrie と結婚して、更に彼女を離婚させたことに対して西洋人は一層、彼を嫌悪し憤慨することになる。この西洋人の彼に対する嫌悪感は、即ち人間の持つ感情というものに起因するものなのであって、感情とは他人によっては勿論、その人自身によっても別のものに作り変えることは困難なことに、彼は盲目である。彼は同僚である西洋人 Piet によってこれを知らされるが、彼と Piet との一連の対話の中では、人間の心理と同情、反感といった感情の深淵にまで触られている。

Hanafi は結局 Rapijah と Corrie の二人に罪を犯す。Corrie は「既に磨かれた高価なダイヤモンド」、或るいは「西洋の花 (bunga dari Barat)」として喩えられ、一方 Rapijah は「未だ磨かれざる高価なダイヤモンド」、或るいは「東洋の花 (bunga dari Timur)」として同等に喩えられている。Rapijah は東洋の礼節と義務を知って、忍耐心と心の気高さを持つ女性であるが、「Hanafi はこの未だ磨かれざるダイヤモンドを夫として上手に磨くという義務を忘れ、この高価なものは捨て去られてしまう。」⁽⁴³⁾「東洋の花の蕾が夫 Hanafi の東洋的な世話と十分な配慮を受けたら、きっと咲いて美しい花となるものだが、西洋的で誤った彼の世話を受けた為に、東洋の花の生は妨害されてしまうことになる。」⁽⁴⁴⁾一方 Corrie も Rapijah 同様、気高い心を持つ女性であるが、「Hanafi はこの既に磨かれて高価なダイヤモンドを上手に使用せず、この高価なも

のは彼から離れ去ってしまう。』⁽¹⁵⁾東洋人、西洋人両側から好まれない結婚、孤立生活、それに人々の諷刺によって毎日彼が受ける侮辱といったもののすべては、彼の心を害し、また彼の世界を狭くするものであったが、しかし、しばしば彼が忘れたことは、妻の Corrie も彼と同じ運命にあることである。彼は外部に於ける彼の憤慨をすべて家庭内に持ち込み、罪のない Corrie が何度も彼の心の罫の犠牲になる。彼は彼女に対し気を配らず、毎日、辛辣な言葉や態度で彼女の不安を募らせ、忍耐と彼女に対し公正な態度を欠く。後に彼は彼女に対する自己の誤りを悟るが、やがて彼女にスマラングの rumah sakit Paderi で会った時、彼女はコレラに罹っていて他界してしまう。彼と彼女との間にしばしば見解の相異が生じたが、これは彼が生来、心の中に持っている東洋人としての東洋性と、彼女がやはり心の中に生来、持っている西洋人としての西洋性に起因する。「この東洋性というものは西洋式の養育によって消失させられ得ないもので」⁽¹⁶⁾、「この東洋性と西洋性は、東洋人と西洋人のそれぞれの感情の中に異っているところが多い為、結び合わされることは全く困難である。』⁽¹⁷⁾「Hanafi はこれを忘れ去ってしまったのである。』⁽¹⁸⁾

Hanafi の西洋式の養育は、彼が生来、心の中に持つ東洋性というものの上になされた、いわばメッキの養育であって、彼の養育は彼がもとより東洋人である為、東洋の様式に従った養育になされるべきであるが、結果は誤った西洋式の養育 (Salah Asuhan) になったというのである。養育のあり方については、次の Hanafi の母親の言葉と Hanafi 自身の反省に如実に具現されている。„……pelajaran agama kita jangan-lah di-tinggalkan. Salah benar ibu mengasoh Hanafi masa dahulu, kerana sedikit pun ia tidak di-beri pelajaran agama, sedang dari kecil-nya ia sudah mengasingkan diri daripada pergaulan bangsa-nya……” (……我々の宗教教育は無視されてはいけないのだ。私は以前、Hanafi の養育を全く誤った。というのは、彼は少しも宗教教育を与えられず、幼少の頃から彼の民族 (東洋人) の交際から離れていたからだ。……)⁽¹⁹⁾ „……Biar-lah anak itu menerima pelajaran Barat sa-chukup-nya, sedang segala kebiasaan orang Timor yang burok-burok boleh di-buang-nya dan di-ganti-nya dengan ‘adat kebiasaan orang Barat yang baik, tetapi sebab ia orang Timor, hendak-lah asohan-nya itu tetap menurut chara Timor juga……” (……子供の Shafei に西洋教育を十分受けさせてよい。東洋人のよくない慣習のすべてを Shafei は捨て、西洋人のよい慣習と取替えてよいが、しかし Shafei は東洋人である故に、彼の養育というものはやはりあくまで東洋の様式に従うべきなのだ。……)⁽²⁰⁾ 東洋人にとって養育は東洋人たることを忘れず、西洋のものをただ盲目的に模倣するというのではなくて、西洋のよいものを学びとって、理解と理性で以ってこれを生活の具に資するものにしなければならないという生活の教訓が示唆される。Salah Pilih の中では、Asri が自己の受けた西洋教育を基盤にして私立学校や共同組合などに於ける社会福祉事業に尽力する。このように西洋から学んだものを民族社会の発展に資するものにするという姿勢が、両作品で「西洋の慣習、生活様式・生活態度模倣」の問題について示唆される大切な教訓である。

Hanafi は Kota Anau の実家に帰る前、自己の過去を反省するが、帰宅後、彼のとらざるを

えない最後の道は、前述のように「死」である。彼は母親や子供に対する自己の義務というものを忘れて、ひたすら Corrie との清廉な愛を求め続けることになる。しかし、Solok から駆付けた医者 Hanafi が亡くなる前に彼に説く次の言葉の中に示されているように、Corrie に対する彼の愛は、彼が義務というものを忘れ、ただ現実から逃避の道を求める故に清廉なものと言えるものではない。人間としての義務の大切さ、倫理・道徳が明瞭に具現されている。„Sa-panjang pendapat saya, cinta itu akan terbukti benar, bila yang menaruh-nya tahu menaruh sabar, tahu menegakkan kepala-nya di-dalam segala rupa merbahaya serta rintangan-nya……Jika orang yang berchinta sa-ketika sahaja sudah menundukkan kepala atau menchari jalan hendak……lari, sa-tiap bertemu rintangan-nya, tidak suchi-lah cinta itu. Ingat-lah, sa-lain daripada isteri yang hilang, tuan maseh mempunyai ibu dan mempunyai anak, …harus-lah tuan terlebih dahulu memegang tegoh akan segala kewajipan, kerana manusia yang tahu kewajipan itu-lah sahaja yang boleh di-katakan manusia, yang layak menaruh dan menerima cinta……”（私の見解では、愛というものはそれを抱く人が忍耐力を持つことを心得、自己のあらゆる種類の危険や障害の中で自己の頭を擡げることが心得ている時に、実際、立証されるものということです。……もし愛を抱く人が自己の障害にぶつかる度にすぐ頭を垂れたり、逃げ道を求めれば、愛というものは清廉なものではありません。あなたは失った妻のほかに、まだ母と子供がいることを思いおこしなさい。……あなたは先ず、すべての義務をしっかり抱くべきです。というのは、義務を心得ている人間のみが愛というものを抱き受け入れるのにふさわしい人間と云い得るからです。……)⁽²¹⁾

このように Salah Pilih と Salah Asuhan の中では Asri と Hanafi に見られるように、「西洋の慣習、生活様式・生活態度に対する模倣」の問題を描写するところが、同様に慣習と強制結婚をテーマとする他の作品とは異なる。これらの二つの作品では、ただ「東洋社会の結婚慣習の束縛からの解放とその慣習の改善」のみが追究されているだけでなく、上述の問題を描写することによって、広く西洋社会の慣習と生活態度との関係にも触れる。東洋社会の慣習、生活様式・生活態度と西洋社会のそれらとは、当然大きな相異があることを認め、それぞれの社会環境にあって人間が如何に生活すべきか、つまり生活のあり方を示唆する。東洋社会の慣習や制度については、すべてよくないのではない。よくないものがあって、改善されなければならないものもあるが、尊重し維持していかなければならないものもあるというのである。また、東洋社会、西洋社会の生活様式・生活哲理は、それぞれ長い伝統のもとに培われ、はぐくまれてきたもので、それぞれの社会環境にマッチした尊いものなのである。従って、それぞれの社会にあって平和に生活する為に、これらを正しく理解し、環境に順応することが「生活の衣裳 (pakaian buat hidup)」⁽²²⁾、つまり「生活のあり方」なのである。Asri 同様、Hanafi も内面に持つ東洋人としての東洋性を忘れる。この東洋性は、西洋人が内面に持つ西洋性と結びつけることは実に困難なこ

とであり、これを正しく理解する理性が必要なのである。この Salah Pilih と Salah Asuhan という作品の中では、感情と人間心理の深淵にまで触れられ、「倫理・道徳」と「理性」が追究されている。

お わ り に

慣習と強制結婚をテーマとする大部分の作品に於いて、古い世代階層と新しい世代階層の対立抗争の結末は、慣習に固執する古い世代階層の勝利であって、青年階層は「死」という悲運をたどる。これらの作品の中では、慣習の束縛からの解放とその改善を希求する青年階層は「死」という永劫の世界に移されるのである。Salah Asuhan の Hanafi の運命もそうである。しかし Salah Pilih という作品の中では、慣習に固執する側である Saniah と R. Saleah は「死」をこうむる。この慣習に固執する側を「死なせる」という抗争の結末を与える方法は、慣習と強制結婚をテーマとする他の作品には見られず、この意味に於いて Salah Pilih は特筆されるべきである。

Salah Pilih と Salah Asuhan の中では、慣習と強制結婚がテーマとなっているほか、更には「西洋の慣習、生活様式・生活態度に対する模倣」の問題が motif とされ、広く西洋社会の慣習と生活態度との関係にも触れられる。Salah Pilih より Salah Asuhan に於いて、この問題がより深く描写される。この意味に於いて Salah Asuhan は特筆されるべきである。

この二つの社会小説の中では、人間の感情という内面の深淵にまで触れられ、人物の心理が細やかに観察され描写されている点から、両作品は心理小説的性格をも帯び、また人間生活のあり方に於ける「倫理・道徳」と「理性」に触れる点から、倫理小説の性格をも多分に帯びるものである。

註

- (1) Nur Sutan Iskandar; Salah Pilih, Kuala Lumpur, Chetakan II, 1967. p. 67 l. 16~l. 20
- (2) ibid. p. 77 l. 23~l. 27
- (3) ibid. p. 199 l. 16~l. 17
- (4) ibid. p. 200 l. 14~l. 15
- (5) ibid. p. 245 l. 24
- (6) Abdoel Moeis; Salah Asohan, Chetakan ke-4, Kuala Lumpur, 1968. p. 38 l. 27~l. 30
- (7) ibid. p. 86 l. 2~l. 3
- (8) Nur Sutan Iskandar; Salah Pilih, Kuala Lumpur, Chetakan II, 1967. p. 31 l. 22~l. 30
- (9) ibid. p. 32 l. 17~l. 26
- (10) Abdoel Moeis; Salah Asohan, Chetakan ke-4, Kuala Lumpur, 1968. p. 2 l. 19~l. 29

- (11) ibid. p. 311 l. 15~l. 17
- (12) ibid. p. 31 l. 16~l. 17
- (13) ibid. p. 275 l. 21~l. 23
- (14) ibid. p. 312 l. 28~l. 31
- (15) ibid. p. 275 l. 26~l. 28
- (16) ibid. p. 311 l. 27~l. 28
- (17) ibid. p. 311 l. 32~l. 34
- (18) ibid. p. 311 l. 26
- (19) ibid. p. 251 l. 31~l. 33 p. 252 l. 1~l. 2
- (20) ibid. p. 302 l. 33~l. 34 p. 303 l. 1~l. 4
- (21) ibid. p. 334 l. 28~l. 35 p. 335 l. 1~l. 2, l. 12~l. 15
- (22) ibid. p. 300 l. 5

文 献

- Nur Sutan Iskandar; Salah Pilih, Kuala Lumpur, Chetakan II, 1967.
- Abdoel Moeis; Salah Asohan, Chetakan ke-4, Kuala Lumpur, 1968.
- A. Teeuw; Pokok dan Tokoh I (dalam Kesusasteraan Indonesia Baru), Tjetakan ke-3, 1955.
- H. B. Jassin; Kesusasteraan Indonesia Modern dalam Kritik dan Esei, Djakarta, Tjetakan-4, 1967.
- Dr. C. Hooykaas 著 Raihoel Amar gl. Datoek Besar 訳; Perintis Sastra, Djakarta, 1951.
- Usman Effendi; Kesusasteraan Warna-sari Epik dan Lirik, Djakarta, 1953.
- Usman Effendi; Sasterawan² Indonesia, Djakarta, 1958.
- Zuber Usman B. A.; Kesusasteraan Baru-Indonesia, Djakarta, 1957.
- Asis Safioedin; Ichtisar Roman, Bandung, Tjetakan ke-6, 1962.
- T. R. Poedjawijatna; Ichtisar Kesusasteraan Indonesia, Djakarta, 1955.
- Sabaruddin Ahmad; Pengantar Sastra Indonesia, Medan, Tjetakan ke-4, 1956.
- Sabaruddin Ahmad; Puntja Sastra Indonesia, Medan, 1956.
- B. Simorangkir-Simandjuntak; Kesusasteraan Indonesia II, Tjetakan ke-9, Djakarta, 1961.
- Marah Rusli; Siti Nurbaya, Chetakan ke-2, Kuala Lumpur, 1966. etc.